

遊工房アールスペース 年間報告書 2019



youkoboART SPACE



遊工房アールスペースのアーティスト・イン・レジデンス事業は
平成31年度 アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業として採用されました。

目次

・はじめに - 遊工房レジデンスプログラム30年目の節目・2019年

・遊工房アートスペースについて - ヴィジョン、ヴァリュー、ミッション

・寄稿 - ブックエンド (物語) クリントン・キング

 巡回 ジュリー・カーチス

1. 主要事業

1-1 AIRプログラム

1-2 展示プログラム

1-3 イベント - アーティストトーク、クリティック、セッションなど

2. 関連活動

2-1 AIR交流プログラム

2-2 Y-AIRの実践

2-3 ネットワーク活動

2-4 地域活動、コミュニティーアート

2-5 調査研究

2-6 アーカイブス

・出版物、掲載記事など

・2019年活動一覧 - Overview

* 本文中の記号について

文 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業

M マイクロレジデンス関連事業

Y Y-AIR(若手アーティスト育成・教育プログラム) 関連事業

E ECOC (欧州文化首都) 関連事業

R YRP, Youkobo Returnee Residency Program

遊工房レジデンスプログラム30年目の節目・2019年

村田達彦

30年前、1989年、トルコ・イスタンブールからの建築家と彫刻家のカップルが、松前財団からの招聘で半年程の滞在予定を組んで来日したのが我AIRの始まりだ。この2人との関係は、彼らの国に私が半年ほど滞在した1966年に生まれた現地のお医者さんとの縁が基だ。1966年当時、工科学生であった小生のトルコでの半年間の滞在体験で、その時の主たる目的は、現地の新設工場の研究室で夏の3か月の技術研修としてのインターンシップであった。（この顛末の話は、別の機会に）

当時、パートナーの彫刻家・弘子のスタジオと、自らの住空間の提供で何とかスタートしたが、偶然にも、適当な創作と研究に集中できそうな空き家を神奈川県藤野町に見つけることが出来、遊工房の分室として借り上げたことが始まりである。当時、オーストリア政府の自国アーティスト向けゲストハウスが藤野町に既に存在していたこともあり、そこでの交流も自然に始まった。そして、「世界にあるAIRという存在」を知るようになった。

東京・杉並でのアート活動拠点である遊工房は、自らの創作活動と共に、創作仲間の交流、滞在の機会と場の提供を行ってきた。この始まりは、その後、色々に形を変えながら継続、発展し、地域との交流も深まりしっかり根の生えたものとなった。主として海外作家の滞在制作希望者の受入れと共に、並行して遊工房と縁が出来る海外のレジデンスにも、積極的に日本人作家を派遣、紹介する、双方向のAIR活動をして来たのがこの30年である。これまでに、50か国343名の海外からのアーティストが滞在し、活動を通して新たな経験を積むと共に、250名を超える国内外の若手アーティストを中心とした展覧会が行われてきた。

30年を振り返り、どのケースも大きな事故がなく無事過ごせたことは、唯一無二の成果と考えている。

この先の遊工房の安定的な持続性ある活動とは何かを、これまでに関係して下さった皆さんと共に考える大事な年の始まりである。

一昨年からはじめた、「お帰りなさいアーティスト・Youkobo Returnee Residence Program, YRP」は、限られた予算での再招聘プログラムとして、10年ぶりの再会の例など、感動する場面が生まれている。

AIRの一層の普及、AIRの評価尺度の言語化・数値化など、狭いAIR運営者団体の中での語り合いと共に、自らの表現力を通して、世界の中で物を言うアーティストへの尊敬の念を、さらに形にしていく為の努力の始まりの年となった。

2019年の活動の足跡を見て頂けることに感謝します。

皆さんのお考えを拝聴できる場作りともなる、ユニークなAIRとしての存在を目指したいと思います。

遊工房アートスペースについて

アートは社会と一体の不可欠なものであり、人々の生活に潤いと気付きをもたらすものです。遊工房アートスペースは、独自のアート活動を通して、地域性と国際性、伝統文化と現代美術という一見異なる方向性を示す要素を繋ぎ、多様性が自然に受け入れられる場づくりや交流を実践しています。真摯に活動するアーティストの表現活動の支援と共に、地域社会の一員として、今後とも実践を通じたアート活動を継続していきます。

ヴィジョン

遊工房アートスペースは、多様な創作活動に応える実践の場となることでアーティストを支え、アートの社会的な役割とその重要性を提示することを目指しています。

バリュー(核となる価値観)

・開放性と交流:

アートは広く開かれるものであると同時に、異文化の人々のコミュニケーションと理解を育てるために必要なツールであると考えます。

・フレキシビリティ(柔軟性):

アートとアーティスト活動の本質に対して、私たちの活動はフレキシブルな取り組み方が不可欠であると認識します。

・自律性:

コミュニティや他の組織と強固なネットワークを保つことを大切にしながら、アーティストと遊工房自身の個性と多様性を維持します。

ミッション

真摯に活動を続けるアーティストの創作・発表の活動を支援します。(AIR プログラム、ギャラリー・プログラム) 国内外のアーティストの交流、さらに地域社会の人々との対話を通じた相互理解の醸成を図り、多様性が受け入れられる社会の形成を目指します。(アート・イベント、トーク)

他の AIR センターやアートスペースとのネットワークを築き、より多くの人々がアートを楽しめる環境づくりに努めます。(Res Artis、J-AIR Network、AIR-J など)

人々がアートに接する様々な機会を生み出し、アートが社会にとって不可欠であるという認識を広まるよう努めます。

ブックエンド（物語）

クリントン・キング

(2019年遊工房レジデンスアーティスト)

遊工房アートスペースに初めて訪れたのは2006年の夏である。これは、私が日本に初めて長期間（2年間）滞在することになる始まりの印であって、私にとって大きな変化となった。

私の日本到着には、アイデンティティの危機が伴っていた。数ヶ月、日本で暮した後、その危機は落ち着き、当初の新しい文化に浸ることでの興奮は、深い不安感に変わっていった。この新しい文脈の中で、以前は快適で、おそらく受継がれていた習慣と習慣の不十分さとその限界を感じた。友人がユーモアを理解できないとき、衣服がうまくフィットしないとき、言葉で失敗したとき、参照が平坦になったとき、自分のお気に入りの音楽や映画を誰も知らないとき、外部の文脈固有の記号表現によって、あなたは自分のアイデンティティがどれほど支配されているかに気付くだろう。生々しく感じた。私が、その最初の旅行で落ちなかったことに気付いた人物。そして、日本で本当の自分を再発見しなければならなかった。

遊工房を初めて訪れたとき、私の中の何かが変わった。大人になるための最初の変化の踏み台としてこれを常に忘れない。そこで過ごした時間は、自分自身や世界との関係、そして強いては芸術的実践をどのように思い描くかという劇的な進化を余儀なくされた。

これらの理由から、10年以上経過してからまた遊工房に戻ることは、単にアーティストレジデンスに参加することよりもはるかに意味があった。私にとって、遊工房は日本で仕事をする時間とスペース以上のものを提供した。ニューヨークのアーティストとして、遊工房を去ってから、私が過ごした12年間の間に起こったことをすべて振り返る機会を与えた。アーティストはキャリアを積むにつれて、常に前進し何か新しいことを試みようとする。新しいギャラリーでの展示、新しいキュレーターとの提携、新しい異なるレジデンス・プログラムへの参加などである。しかし、遊工房が再来日アーティストをホストすることを続けているなんて天才的だ。私が見つけたように、皮肉なことに、どこかに戻る前に、どれだけ変化したかを完全に把握し、どのように進化したかについて正直に言うことができる。

ニューヨークで10年間活動した後、遊工房に戻ったこの巡礼の旅は、私自身の環境では気付かなかったであろう事柄を可視化した。私の最初の訪問時のように、それは私が遊工房でしか得られなかったと確信した視点を与えた。それは私の人生の形成期を表す。

遊工房にいることは、私の仕事に直接的な影響と長期的な影響を与えた。私の最初の訪問時と同様に、私は自分が誰であり、私の練習が何であるかについての先入観を捨てる期間を経験した。私は彫刻でMFAを取得したが、近年では、彫刻から主に絵画を手がけるようになっていく。しかし、遊工房に戻って彫刻の制作を復活させる衝動と自由を得た。滞在中に、いくつかのモビールを制作した。それぞれが日本の独特な素材の形から引き出されたものである。たとえば、神社のカラスの羽、地元の植物の黒い種の莢、東急ハンズの黒いゴムの形を取り入れたもの。別のものは、ミニチュアの鐘、エアープランツ、イミテーションの柿、ウルトラマンのおもちゃ、何個かの日本の人形、および埴輪の置物などで構成されている。

このように限られた時間内で制作せざるをえなかったことで、私は自分の創造の限界と長所に気付いたのだ。私の絵は非常に手間のかかる過程を考える仕事を伴い、遊工房での時間的制約下で座って直観をコントロールしなければならなかった。制作に直観の余地があることに気づき、続けるうちに自分の仕事のできることとできないことについて、先入観を捨て自由になりたいと考えた。

遊工房にいる間、アーティストのジュリー・カーティスと私はスタジオで、村上春樹の本「海岸のカフカ」のテープを聞いた。村上の小説には、主人公がひっくり返すとパラレル・ワールドに入る超自然的な石がある。この石は、この代替領域への道を開けたり閉じたりするのに役立つ。村上の本とレジデンスでの時間を振り返ってみると、遊工房は私にとってのブックエンドであったとおもう。それは、ニューヨークでの過去12年間の私を占めて来た芸術的実践の始まりと終わりを表している。ある意味で閉じる時であり開く時であることに気づいた。遊工房を前に訪れた時のように、私には自身の創作の新しい目標へと活動を始める準備ができていた。



巡回

ジュリー・カーチス

(2019年派遣アーティスト)

昨年の秋、私は、遊工房アートスペースの滞在制作・再招聘プログラムの一環で、選ばれて、再度、遊工房に滞在することができた。10年以上以前・2008年に、遊工房に滞在していた、両方の経験は各々異なったものとして創造的で芸術的な経験であったことは確かである。

10年前に遊工房のレジデントとして最初に滞在したとき、私は、学校を卒業したばかりでまだ、芸術家としては駆け出しで、些か孤独で、知識やアイデアを交換できる芸術的なコミュニティとのつながりを模索した。遊工房は、そういう私を、信頼できるアーティストのインターナショナルな関係と繋げ自分自身と修練を進めるためのプラットフォームを与えてくれた。しかし、それ以上に重要なことは、支え、励まし、思いやりのあるアートコミュニティがどのようなものかを示してくれたことである。

遊工房での最初のレジデンスは、今の私の創作の基礎を築くために役立った。滞在中、私は、日本の女性向けに販売されている凝った美容養生法と不安を煽るような教育パンフレットの内容に興味をひかれ、ローカルなファッション雑誌と一緒に収集して墨を使って修正を加えた。クリントン・キングとの二人展「Split Ends」で発表した、この一連の作品は、人工と自然、美、そして不可解な文化的基準と身体がテーマであり、今もこのテーマに取り組んでいる。

遊工房での今回の滞在中、長い間私を魅了してきた日本特有の事柄に焦点を当て、新しい仕事を追求したいと思った。食品サンプル：レストランが、お客を誘導するために使用する超現実的で奇妙に美しいプラスチック食品サンプル。食べ物は私の作品の中で繰り返し登場するテーマになっており、たびたび、魅惑的なものとおぞましいもの間の多孔性を探る方法として、現代の生活の超現実主義的な要素を掘り下げて、私たちの肉体的な食欲が贅沢で異常で奇妙なもので刺激させる。このレジデンスのおかげで、他の方法では入手の困難な素材を使用して、作品を深く豊かにするインスピレーションの源に囲まれ、まったく新しいシリーズの彫刻を作成することができた。また、今回はガッシュでの白黒の絵画に戻り、将来の仕事の基礎を築く機会として利用した。日本滞在中、神社仏閣、浮世絵など、その他の日本の伝統芸術をリサーチした。これらの見識は、新しい方向性やアイデアと実践に取り組もうとする私の疑問に大いに活力を与えた。たとえば、神社仏閣で見られる屏風絵で使用されている図像、空間の使用法、描画の技法を見ると、この直の体験から強く引き出される新しいシリーズのプリントに着手する切掛けができた。

遊工房アートスペースで育まれたユニークなコミュニティは、レジデンスの決定的な部分であり続いていることに深く感謝している。私が参加した遊工房の企画トーク・イベントと、内輪のチャンネルの機会の両方で、仲間のレジデント・アーティストと豊かな対話することができた。それは私たち一人一人がアートの世界についてより微妙でグローバルな視点を残せたと感じている。同時期滞在中のヤン・チェンの、比較研究で日本の美術館と海外の美術館との違いについて聞いたことや、政治と芸術の関係について、ニューヨークをベースに活動している私の見解を共有することに至るまで、これらの会話は異文化交流の重要な場面を提供した。地域での「Trolls in the Park」アート・フェスティバルと、遊工房でのクリントン・キングとの2人展「タンデム」を通じて、自分の作品を地域のコミュニティと共有できたことも嬉しかった。どちらの場合も、サンプルに触発された彫刻が、人々が、当たり前と思っていた事柄に、違う見方を受け入れたことを知り嬉しく思った。鑑賞者の反応から、このシリーズ作品が、サンプルに対する認識を変えたことは明白であり、おそらく、これらの日常オブジェクトの芸術性を強調し、同時に反発と魅了の両面からオブジェクトの不可思議さを探っていくだろう。クラフトやプロセスについての会話を引き受けた。これは、他のコンテキストで作品を見る人との議論とは異なる。

遊工房アートスペースは30年目の現在を祝い、10年以上も私を形作ってきた、慣れ親しんだ場所を超えて旅し、貴重なインスピレーションの源泉を活用するためのスペース、コミュニティ、リソースを提供してくれたことを振り返り、この組織に深く感謝する。レジデンスは終了したが、遊工房の私の創造への影響は今後何年も続くだろう。



1 主要事業

1-1 AIRプログラム

2018.12.01 - 2019.01.31	アンティ・ニューソラ	文 M
2018.12.02 - 2019.02.28	リリアン・オニール	文
2018.12.04 - 2019.01.31	スヴェトラナ・フィアロヴァ	文 M E
2019.02.01 - 2019.03.31	ナタリア・エスクデロ・ロペス	文
2019.03.01 - 2019.03.30	パイヴィ・ルッカリラ	
2019.03.01 - 2019.04.30	カイ・レネス	文
2019.04.01 - 2019.05.31	ジュリア・サントーリ	文
2019.04.01 - 2019.04.30	マリアンヌ・バックレン	
2019.05.01 - 2019.06.14	ギリース・アダムソン・センブレ	文 M Y
2019.05.01 - 2019.05.31	ユルキ・ヘイッキネン	
2019.06.04 - 2019.07.31	ミア・カバルフィン、ロサム・プルデンシャド・Jr.	文
2019.06.16 - 2019.07.31	ダリア・ブルム	文 M Y
2019.06.16 - 2019.07.29	ジョンバティストゥ・ラガデキ	文 M Y R
2019.06.19 - 2019.07.31	エレノ・ターンブル、リディア・ディヴィス	文 M Y R
2019.07.01 - 2019.08.31	ボルハ・ゴメス・ディエス	文 M Y
2019.07.15 - 2019.07.25	グラハム・エラード	文 M Y R
2019.08.01 - 2019.09.30	ヘレナ・カイッコネン	文 M
2019.08.01 - 2019.09.30	フランク・ミルトゲン	文
2019.09.01 - 2019.11.30	ヒカル・クラーク	文
2019.10.01 - 2019.11.30	クリントン・キング&ジュリー・カーチス	文 R
2019.10.01 - 2019.11.30	ヤン・チェン	文 M Y
2019.10.01 - 2019.11.30	高島亮三	文
2019.12.01 - 2020.01.31	テーム・コーペラ	文
2019.12.01 - 2020.01.31	ベンジャミン・ウッズ	文
2019.12.01 - 2020.01.31	アニタ・イエンセン	文

<p>2018.12.01 - 2019.01.31 アンティ・ニューソラ[フィンランド]</p> <p>国際AIR間プログラム (Finnish Artists' Studio Foundation) 招聘アーティスト。伝統に基づく絵画作品を制作する一方で、切り取った物や防水シート、粘着テープ、シール、紙など、様々な異なる種類の日用品を用いて、作品を作る。崇高で高貴なテーマは、低級あるいはカウンターカルチャーから精通する美学を利用しながら扱う。作品は抽象と表象、絵画と彫刻の間にある、あるいはそれらが共存したものである。滞在中、ハンドメイドのアーティストブック制作し、オープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2018.12.02 - 2019.02.28 リリアン・オニール[オーストラリア]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (Asialink) 招聘アーティスト。大規模なアナログのコレクションに取り組む。それぞれの作品はそのスケールと物語において、哀愁を帯びた宇宙観、過ぎゆく時間の封入、壮大な廃墟、有史以前の神話、エロチシズムと死を主張する。それらはコラージュのプロセスによって、自然とテクノロジーに直面して複雑で神話的、かつしばしば皮肉なシナリオを構築する。滞在中、彼女はアーカイブやプレデジタルの本、雑誌などからオフセット印刷のプレデジタル写真を調達し、大型コラージュ作品をオープンスタジオと展覧会にて発表した。</p>	
<p>2018.12.04 - 2019.01.31 スヴェトラナ・フィアロヴァ[スロバキア]</p> <p>国際AIR間プログラム (K.A.I.R.) 招聘アーティスト。実践において、習慣的な境界に同調し、有限性についての考察を論破しようとする一方で、媒体としてのドローイングを絶えずに展開する。彼女はスロバキア及び世界の美術史における形式的特徴を取り入れつつ、現代のヴィジュアルアートの流行を融合させる。滞在中、彼女は日本の社会構造、特に日本における女性の地位や役割について探求し、ドローイングや木版画、インスタレーションなどをオープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2019.2.01 - 2019.03.31 ナタリア・エスクデロ・ロペス[スペイン]</p> <p>見つけたものでの繊細な組み立てや言葉、ビデオなどによる彼女のインスタレーションでは、アートと実生活の境界は消え、異なる部分の間で潜在的な感情を再現しながら、循環としてライフとアートが現れる。遊工房では、祖父母の家にあった陶磁器に基づいて、学際的なプロジェクトを行った。滞在中、日本の技術である金継ぎに基づいた錬金術を実践し、時間の経過に伴う物質の絶え間ない変化について考える。リサーチと制作の成果として、ドローイングやインスタレーションなどをオープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2018.03.01 - 2019.03.30 パイヴィ・ルッカリラ[フィンランド]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (Union of Finnish Writers) 招聘ライター。日本の芸術や文化に興味を持っており、和道流空手を数年間稽古してきたため、流派の型である残心（全体を意識する状態）に魅了されるようになった。滞在中は、青少年向け小説の草稿に取り組み、武道の敵の代わりに自身の内なる相手に出会う用意をしなければならない日常生活において、残心を成し遂げるというアイデアを熟考した。滞在中の終盤で和訳されたフィンランド語の児童書についてのトークイベントを実施した。</p>	
<p>2019.03.01 - 2019.04.30 カイ・レネス[フィンランド/スウェーデン]</p> <p>ブリュッセルとバルセロナを拠点に活動するアーティスト。彼の作品は、科学から美術工芸・哲学や宗教から芸術に至るまで、人間の知識の異なる領域にまつわる（ポスト）現象学的記録と考察である。彼の作品のための重要な共通の特徴は、同じ作品において知識の異なる人々の相互作用である。遊工房アートスペースでの2ヶ月間の滞在中、彼は様々なメディアを用いて制作を続け、特に和紙への写真印刷の可能性を研究し、写真やインスタレーションをオープンスタジオにて発表した。</p>	

<p>2019.04.01 - 2018.05.31 ジュリア・サントリ[米国]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (アジア・カルチュラル・カウンシル) 招聘アーティスト。ブルックリンを拠点に活動する学際的なアーティストであり、実験音楽家、作曲家でもある。声、反響、電子回路、及びインスタレーションを用いて没入的かつ不安定な環境を構築し、サイトスペシフィックな音のアプローチの身体的な意味を混在させる。遊工房では、ISSUE Project Room(ニューヨーク)での滞在制作から続く一連のプロジェクト”Siren Sore”に取り組み、サウンドインスタレーションとパフォーマンスをオープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2019.04.01 - 2019.04.30 マリアヌ・バックレン[スウェーデン/フィンランド]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (Union of Finnish Writers) 招聘ライター。スウェーデン系フィンランド人のライターで、小説を主として14冊の著書を発表し、様々な文化誌にも寄稿している。彼女の小説「Karma(カルマ)」は八正道に基づく仏教をテーマにしている。彼女にとって、個々のカルマと世界平和の可能性、広宣布布に焦点をあてることは、それは仏教の現代の形を表す。滞在中、彼女は執筆中の小説に、現代の日本の場面を入れるべく執筆活動を進め、終盤にフィンランドの生活についてのトークイベントを実施した。</p>	
<p>2019.05.01 - 2019.06.14 ギリース・アダムソン・センプレ[スコットランド/英国]</p> <p>London/Tokyo Y-AIR Exchange Program 2019招聘アーティスト。アーティストであり、キュレーター。視覚的語法を作り提示するため、ディスプレイや装置を使って制作し、会話やコミュニケーション・システムから瞬間を隔離することがよくある。彼の作品は、歴史をカウンターウエイトとして郷愁に再配置するように取り上げ、そして彼自身の視覚言語の中で再構築される素材として、個人的な出会いやより広い出来事の瞬間を描いている。滞在中、彼は美術館の展示方法や街の広告などを研究素材に、エッセイ的な映像や写真、インスタレーションに取り組み、オープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2019.05.01 - 2019.05.31 ユルキ・ヘイッキネン [フィンランド]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (Union of Finnish Writers) 招聘ライター。フィンランドの詩人であり、グラフィック小説家、イラストレーター。過去10年の間、彼の視覚的な詩のプロジェクトは、イメージや漫画、詩、展示、出版物などの形を通じて発展している。イメージと言葉との間の繋ぎと棲み分けを考え、それらが如何に時間内で適合し、異なる媒体が最終作品に影響を与えるかを研究し続けている。滞在中、彼は三部作の詩の最終部分に取り掛かった。また、東京の日常をスケッチし、終盤にトークイベントと展覧会を実施した。</p>	
<p>2019.06.04 - 2019.07.31 ミア・カバルフィン、ロサム・ブルデンシャド・Jr [フィリピン]</p> <p>フィリピンのマニラに拠点を置く二人組のダンサーであり振付家。個々にキャリアを積んできた彼らは、2012年にデュエットを開始し、以降意識的にデュオとしての作品を創るフィリピンの現代舞踊の中で数少ないダンサーである。滞在中「Pahayag」（表現）と題し、「人口」をテーマとした学際的なパフォーマンス及びビデオインスタレーション作品を創り、オープン・スタジオで作品を上演。また、ダンスワークショップを遊工房、地域の小学校やダンス教室にて実施した。</p>	
<p>2019.06.16 - 2019.07.31 ダリア・ブルム [イギリス]</p> <p>London/Tokyo Y-AIR Exchange Program 2019招聘アーティスト。彼女のライブ・パフォーマンスとビデオ・インスタレーションは、異なるスタイルの動きや装い、そして自身で構成する詩や楽曲を用い、自己表象とパフォーマンスにおける(女性の)身体の使用の対立をテーマに実行する。滞在中、舞踏や現在の日本のコンテンポラリーダンスを体験し、日本という馴染みのない状況や文化的な”未知”に対する反響を研究した。終盤では、地村と共にインスタレーション及びパフォーマンスをオープンスタジオにて発表した。</p>	

<p>2019.06.16 - 2019.07.29 ジョンパティストウ・ラガデキ [フランス/イギリス]</p> <p>London/Tokyo Y-AIR Exchange Program5周年記念展「Ai mi Tagai」2019招聘アーティスト (LTYE2017招聘)。1992年パリ生まれ。2016年にセントラル・セント・マーチンズ校美術専攻を卒業。デジタル作成されたイメージの、あるコードに対して有形的な手法に呼应しながら、スクリーンに代わるものを探している。新しい文化遺産とも言えるデジタル制作を、時代を超越したペインティング史の中で実証的に更新する試みである。滞在中、展示とフォーラムに参加及び来年の計画に参画。</p>	
<p>2018.06.19 - 2019.7.31 エレノ・ターンブル&リディア・デイヴィス[イギリス]</p> <p>London/Tokyo Y-AIR Exchange Program5周年記念展「Ai mi Tagai」2019招聘アーティスト (LTYE2015,2016招聘)。ターンブルは、1992年ダラム生まれ。ロンドンとコーンウォールを行き来しながら活動。主に彫刻と映像作品を制作。デイヴィスは、1991年一セット生まれ。現在グラスゴーを拠点に活動。写真や映像、音や執筆などを用いた作品を制作。滞在中、展示とフォーラムに参加及び来年の計画に参画。</p>	
<p>2019.07.01 - 2019.08.31 ボルハ・ゴメス・ディエス[バスク・スペイン]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (スペイン・バスク自治政府ビスカヤ県文化部) 招聘アーティスト。ビスカヤ若手アーティスト支援プログラム「ERTIBIL BIZKAIA」で優秀賞を獲得。滞在期間前半は、女子美術大学アートプロデュース表現領域・日沼研と協働活動を実施し、中間報告として、co-ume lab.にて制作中の作品をオープンスタジオで公開。また、滞在の終盤では活動の成果としてドローイングを遊工房のオープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2019.07.15 - 2019.07.25 グラハム・エラード[イギリス]</p> <p>London/Tokyo Y-AIR Exchange Program5周年記念展「Ai mi Tagai」2019招聘アーティスト (LTYEプログラムアドバイザー)。アーティストであり、セントラル・セント・マーチンズ校美術学科常勤教師。ロンドンを拠点に活動している。1993年からティーフン・ジョンストンとコラボレーションして以来、作品は多くの博物館やギャラリーで国際的に展示されている。滞在中、展示とフォーラムに参加及び来年のロンドンでの同プログラム実施に向けた計画を進めた。</p>	
<p>2019.08.01 - 2019.09.30 ヘレナ・カイツコネン[フィンランド]</p> <p>フィンランドを拠点とするテキスタイルアーティストで、素材に基づいて生まれる彼女の作品は、時間や北欧の自然、生命のはかなさと力を探求する。素材の起源やそれらの過去の営みは、彼女の作品の内容に影響を与える。変化と反復は、季節と人間の日常生活の歩調を決める。時は経過し物事は進む。しかし、何事も決して終わらず完成もない。滞在中、彼女は日本の歴史、文化、自然や生活を探求したいと考え、異なる素材のコラージュを制作し、オープンスタジオにて発表した。</p>	
<p>2019.08.01 - 2019.09.30 フランク・ミルトゲン[ルクセンブルク]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (ルクセンブルク大使館) 招聘アーティスト。ルクセンブルクを拠点に活躍し、様々な媒体で表現する。知覚への疑問が彼の作品に強く存在しており、時代を超えた人間の知覚の進化、および場所と時間に応じた現実と、その経験を共有する方法に対して広く意欲的な考察と共に、この問いかけを倍増させる。滞在中、日本の伝統工芸を中心に探求し、哲学的な観点から実践を試みた。インスタレーションと映像をオープンスタジオにて発表し、1日限りのパフォーマンスイベントを展開。大使館での展示も実施した。</p>	

<p>2019.09.01 - 2019.11.30 ヒカル・クラーク[ニュージーランド]</p> <p>提携国際機関推薦プログラム (New Zealand Foundation) 招聘アーティスト。彼は建築施設の社会的統制と実装された素材が明らかにする固有の観念形態の伝達機構に興味があり、敵意のあるデザインやテロ対策の建築などの利害関係の空間哲学を通じて困難な関係に従事する。滞在中、オリンピックの歴史とその失策の代替案としての研究をもとに、集中型および分散型の権力の力学の誤りを探った。「トロールの森」にてインスタレーションを発表・アーティストトークに登壇した。</p>	
<p>2019.10.01 - 2019.11.30 高島亮三 [日本]</p> <p>Youkobo Returnee Residency Program 2019招聘アーティスト。日本を拠点に活動。現代の日本では、主導者の「勇ましさ」を是とし、その中身を吟味せずひたすらその「勇ましさ」に追随する閉塞した空気が蔓延している。そのような時代の動向の中、高島はここ数年、ジョージ・オーウェルの小説「1984年」に登場する全体主義国家の掲げるスローガン「戦争は平和なり。自由は隷属なり。無知は力なり。」をテーマにした作品を制作してきた。「トロールの森」にてインスタレーションを発表・アーティストトークに登壇した。</p>	
<p>2019.10.01 - 2019.11.30 クリントン・キング&ジュリー・カーチス[米国&フランス/米国]</p> <p>Youkobo Returnee Residency Program 2019招聘アーティスト。両者ブルックリンを拠点に活動。キングは彫刻、ビデオ、絵画など多様なメディアを扱う。カーチスは、絵画と彫刻作品において、ビビッドな色と共にユーモアと闇、神秘的、日常的、グロテスクな形を結びつけることを楽しむ。2007年共に遊工房で滞在制作をし、12年の時を経て、2ヶ月間の滞在制作のために再び戻り、現場で創作した一連の作品を「トロールの森」にて発表・アーティストトークに登壇した。</p>	
<p>2019.10.01 - 2019.11.30 ヤンチェン[中国/英国]</p> <p>国際AIR間プログラム (StudionAme) 招聘アーティスト。ヤンチェンは、レスター大学 (イギリス) 美術館研究科の博士課程3年生。彼女の研究は、戦後の日本アートコレクティブ実験工房と東京都美術館の関係を理解するため、理論的な枠組を明らかにすることを旨とする。日本の図書館やアーカイブ、美術館などを訪問し、調査を進めた。その研究の成果を「トロールの森」にて発表・アーティストトークに登壇した。</p>	
<p>2019.12.01 - 2020.01.31 チーム・コーペラ [フィンランド]</p> <p>国際AIR間プログラム (Finnish Artists' Studio Foundation) 招聘アーティスト。彼の表現は、媒体としての絵画の歴史と、その可能性を概念的な調査により定義され発展している。長年にわたり、コーペラの絵画はインスタレーションの形が主であったが、最近では平面の仕事に戻っている。彼は、具体的な形を抽象化するということが我々に存在するという経験を決定付ける理解力をつけることができると感じており、思考を形にするための視覚的な要素が共有され、それが作品と周囲の現実に関わり、体験の源を考えるように観客に働きかける所以である。</p>	
<p>2019.12.01 - 2020.01.31 ベンジャミン・ウッズ[オーストラリア]</p> <p>1988年にオーストラリアのメルボルン (ウルンジェリとブーンウルングの国) で生まれ、ふたりの姉達と育った。このような環境下で、早くからアーティストを志す道を歩み始めた。ピアノ、フルート、コントラバス、歌を学び、彼にとってそれは喜びであった。その後、視覚芸術にも挑戦し、絵画、ドローイング、彫刻を学ぶ。大学で彫刻を専攻後、2011年から作品発表を継続している。彫刻が身体認識にどのように関係しているのか、特にその環境下での人々との接近と配慮の距離に興味を持っている。この関心は、彫刻的なフォームの研究として行う音と動きの中でしばしば現れる。</p>	

2019.12.01 - 2020.01.31

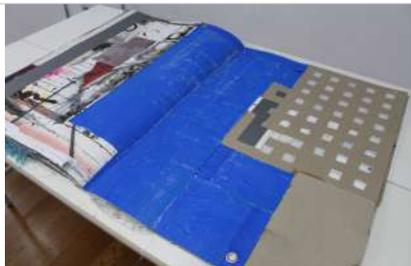
アニタ・イエンセン[フィンランド]

1957年フィンランド生まれ。ヴィジュアルアーティスト・プリントメイカー。彼女の芸術は、日本美術における変形と形の変化と美しさの変化に注目する。写真やグラフィックアートの分野におけるプレゼンテーション、テクニック、材料の形態について新たな視点の紹介を試みる。イメージを通して、日本の美学の形式、概念、用語を私自身の視点から再解釈する。日本古来の素材と展示形式と版画や写真における最新技術や素材を組み合わせることで、自身の作品の興味深い新しい面を生み出している。



1-2 展示プログラム

2019.01.23 - 2019.01.27	スヴェトラナ・フィアロヴァ [スロバキア] I love you - 愛してる
2019.01.23 - 2019.01.27	アンティ・ニューソラ [フィンランド] Antti Nyyssölä - アンティ・ニューソラ
2019.01.23 - 2019.01.27	リリアン・オニール [オーストラリア] OPEN STUDIO
2019.02.20 - 2019.02.24	リリアン・オニール [オーストラリア] 霧の壁
2019.03.20 - 2019.03.24	ナタリア・エスクデロ・ロペス [スペイン] 多島海
2019.03.20 - 2019.03.24	櫻木綾子、加藤康司 [日本] 石の体温(と)呼吸の足跡
2019.04.24 - 2019.04.28	カイ・レネス [フィンランド/スウェーデン] カイハクシツ(灰白質)
2019.05.24 - 2019.05.26	ジュリア・サントーリ [アメリカ] シャドープレー：幻影の土地
2019.05.24 - 2019.05.26	ユルキ・ヘイッキネン [フィンランド] 心の欠如
2019.06.05 - 2019.06.09	ギリース・アダムソン・センプレ [スコットランド/イギリス] 大草原と親密な関係-(オープンスタジオ)
2019.07.19 - 2019.07.28	アビー・ジョーンズ, アリス・ジェイコブス, 磯村暖, エレノ・ターンブル, OJUN, 小津航, 川越健太, ギリース・アダムソン・センプレ, グラハム・エラード&スティーブン・ジョンストン, 郷治竜之介, ショーン・ラヴェール, ジョンバティストゥ・ラガデキ, ダリア・ブルム, 地村洋平, トゥーリ・リトヴァック, 東山詩織, 藤原信幸, 堀内崇志, 堀内悠希, リディア・デイヴィス [日本、イギリス] アイ ミ タガイ Ai mi Tagai
2019.07.04 - 2019.07.13	ミア・カバルフィン、ロサム・プルデンシャドJr. [フィリピン] PHAYAG
2019.07.25 - 2019.07.28	ダリア・ブルム、地村洋平 [スイス/イギリス、日本] Utting Orners
2019.08.24 - 2019.08.28	ボルハ・ゴメス・ディエス [バスク、スペイン] 喜びの空の形
2019.09.18 - 2019.09.22	ヘレナ・カイッコネン [フィンランド] 日本の小道で
2019.09.18 - 2019.09.22	フランク・ミルトゲン [ルクセンブルク] アペイロン - Apeiron
2019.11.03 - 2019.11.23	ヒカル・クラーク [ニューージーランド] 善良なるスポーツ精神
2019.11.03 - 2019.11.23	高島亮三 [日本] 1984 + 36
2019.11.03 - 2019.11.23	クリントン・キング & ジュリー・カーチス [米国、フランス/米国] タンデム / 縦一列

<p>2019.01.23 - 2019.01.27 スヴェトラナ・フィアロヴァ I love you - 愛してる</p> <p>彼女は日本の社会構造、特に日本における女性の地位や役割について探求した。この活動は、男性優位や性別の固定概念等の根源など、彼女の進行中の研究に結合する。地域住民と交流しながら、日常のリアリティを観察し、理解に努めた。様々なレイヤーの日本のポップカルチャーやそれに反する女性の表現、或いは西洋ポップカルチャーや視覚文化との密接な関係性を調べ、特にアイドル文化に興味を持って版画やインスタレーションを発表した。</p>	
<p>2019.01.23 - 2019.01.27 アンティ・ニューソラ [フィンランド] Antti Nyyssölä - アンティ・ニューソラ</p> <p>彼は東京の道端や市場、公共の場や半公共、アンチな場所から作品の素材を集め、ユニークなハンドメイドの大型アーティストブックを継続して制作した。これらの本では、一見無作為なアイテムが触知できる地図を創作し、他の無作為なアイテムと結合されることでそれらの意味を得る。</p>	
<p>2019.01.23 - 2019.01.27 リリアン・オニール [オーストラリア] OPEN STUDIO</p> <p>彼女はアーカイブやブレデジタルの本、雑誌などからオフセット印刷のブレデジタル写真を調達し、旧式の印刷技術の物質性への取り組みを続けながら集めた画像を大規模なコラージュに組み立てた。次月の成果発表に向け、制作途中を発表した。</p>	
<p>2019.02.20 - 2019.02.24 リリアン・オニール [オーストラリア] 霧の壁</p> <p>今の世界がほとんど手放してしまったプレ・デジタル写真は原料であり、ネット上で無限に増殖する高速のデジタルイメージとの明確な対比においてある意味幻想を提供する。言い換えれば、消えゆく写真というものの本質への記念碑である。この素材の集積は、人類の活動や関心、信条を綴じた一種の地図帳となった。</p>	
<p>2019.03.20 - 2019.03.24 ナタリア・エスクデロ・ロベス [スペイン] 多島海</p> <p>地質学的現象の破壊への物質的な反応として、日本の金継ぎ技術に取り組んだ。この実践は、破碎、運動、変化のプロセスに対する彼女の関心を深め、日本列島の風景、そして近年普及した金継ぎの類似点を「焼かれた粘土の破片が流動的なアイディアの海に漂う島々を思い起こさせる。一方でこれらの島は取り扱いたいものだと思ったのだ。」と彼女は言う。</p>	
<p>2019.03.20 - 2019.03.24 櫻木綾子、加藤康司 [日本] 石の体温(と)呼吸の足跡</p> <p>Youkobo Y-AIR Studio Program. 昨年に引き続き、東京芸大新修士課程 グローバルアートプラクティス専攻選抜展として開催。主に映像作品を手がけ、社会と自身との関係性、見えない権力構造を探求する加藤康司と、ファッションデザインを学び、東日本大震災を機に、生と死、日常の美をテーマに制作を続ける櫻木綾子。異なる関心を持ち、一見すると相容れない両作家が、現代における「人間」と「自然」をテーマに掲げることで、化学反応を起こしながら交差した。</p>	

<p>2019.04.24 - 2019.04.28 カイ・レネス [フィンランド/スウェーデン] カイハクシツ(灰白質)</p> <p>「Gray matter - カイハクシツ (灰白質)」では、様々な表現で、人間の知識についての現象学的な記録を通じて一連の展示を続ける。灰白質は、ニューロンからなる私たちの脳内の物質を指す。灰色は、視界を妨げる霧の色でもある。世界は、我々に意味の無限のネットワークとして示される。意味と有意性を再接続し、抽象概念の異なるレベルで操作することで、新しい考え方を作り出せる。</p>	
<p>2019.05.24 - 2019.05.26 ジュリア・サントーリ [アメリカ] シャドウプレー：幻影の土地</p> <p>光や音、演奏などを取り入れたインスタレーションを発表。影による構成は陽の満ち引きによって移り変わり、影が描く景色を通して日の当たる映画のような姿を生み出し、歌が現れる。「まるでそれらが繰り返し上演される演劇の一部であるかのように、我々は歴史の場面や絵画的描写を見る。それらは再び語られ、記憶される。その幻覚は社会的記憶をもたらし、かつての土地、身分、時代、言語、大陸を思い起こさせる。それは、スペクトルの中で凝固した歴史、シグナルのような形である。」マーティン・ハドソン著「幻影と景色、そして社会的記憶」2017年 ラウトレッジ出版</p>	
<p>2019.05.24 - 2019.05.26 ユルキ・ヘイッキネン [フィンランド] 心の欠如</p> <p>彼の詩とイメージが物語を伝えているとしても、それは本質的な価値ではない。何が更に重要なのかと言えば、感情の高まり、夢の残響、そして、どこにも何物にもつながらない道なのだ。線を描くと、秩序を混沌から切り離す。しかし、同時に何か予期せぬものを呼び出したり、招いたりする。また、存在し可視化するために絶えず動く。</p>	
<p>2019.06.05 - 2019.06.09 ギリース・アダムソン・センブレ [スコットランド/イギリス] 大草原と親密な関係-(オープンスタジオ)</p> <p>物と画像の表現として新しいフレームを画定する一連の作品の展示である。整理、収集、研究の場としてスタジオを使い、物と画像は、スタジオの構造物として取り込まれ作品化される。撮影し、レンダリングされ、そして撮影された物と画像は、感性と可能性の両側面から、新たな画定として、様々なプロセスにより、レンズを通して検証され記録される。</p>	
<p>2019.07.19 - 2019.07.28 アビー・ジョーンズ, アリス・ジェイコブス, 磯村暖, エレノ・ターンブル, OJUN, 小津航, 川越健太, ギリース・アダムソン・センブレ, グラハム・エラード&スティーブン・ジョンストン, 郷治竜之介, ショーン・ラヴェール, ジョンバティストゥ・ラガデキ, ダリア・ブルム, 地村洋平, トゥーリ・リトヴァック, 東山詩織, 藤原信幸, 堀内崇志, 堀内悠希, リディア・デイヴィス アイミタガイ Ai mi Tagai</p> <p>2015年から毎年実施している「London Tokyo Y-AIR Exchange Programme」の5年目の節目として、これまでの参加作家及び協力美大教員によるグループ展覧会と、この活動評価のためのフォーラムを開催。本展覧会は、「アイミタガイ」とは、相身互い=同様の境遇にあるもの同士が共感し、助け合うことの意で、まだキャリアの浅い同時代のアーティストたちが、新たな体験を共有しつつお互いの存在を意識しながら支え合い、試行錯誤を繰り返すプログラムの特徴と、我々が考える国際交流の意義になぞらえタイトルに掲げた。2020年ロンドンでの開催を予定。</p>	

2019.07.04 - 2019.07.13
 ミア・カバルフィン、ロサム・ブルデンシャドJr.
 PAHAYAG

Pahaya（表現）と題した学際的なパフォーマンス作品を制作。彼らの最初の突破口は、人口がテーマとなる。フィリピンの人口過多と日本の人口減少の間には明らかな違いがあり、表現力、対話、コミュニケーションなどの他の文化的側面との相関関係もパフォーマンスの根幹へと繋がっていく。また、会期中に大人向け、親子向けのダンスワークショップや近隣の小学校やダンススタジオにてダンスレッスンを実施した。



2019.07.25 - 2019.07.28
 ダリア・ブルム、地村洋平
 Utting Orners

London/Tokyo Y-AIR Exchange Programの活動成果報告として共同展示。ダリアは可塑性や世代を超えたトラウマの調査に基づき、登場人物の物語は、創造的で(再)生成のプロセス、鑑賞者とパフォーマー、ユーモアと悲劇、真実と偽りといった対照的な原動力における推進力として直面するや状況を証明しようとする。地村は彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなどを用いる。「人為を超えた形態の保存と解放」をテーマとして表現活動を続けている。



2019.08.24 - 2019.08.28
 ボルハ・ゴメス・ディエス
 喜びの空の形

滞在期間中、前半は女子美術大学・日沼研と遊工房のY-AIR協働活動に参加し、co-ume lab.での創作と共にオープスタジオ、後半は遊工房スタジオでの創作活動及び展覧会を開催。ビニールに絵の具を付け、薄い和紙ですくい取る技法で描いたドローイングや油画を展示した。8月帰国前には遊工房と黄金町AIR双方の活動報告を実施した。



2019.09.18 - 2019.09.22
 ヘレナ・カイッコネン
 日本の小道で

私がどこで、素材を見つけたのか、それがどこから来たのか、素材がもたらす時の痕跡や、それらがどれ程繊細であると感じるかが、私には非常に重要である。私は、それをよく「手で考える」と言い表す。指先に感じる素材の質感が、私の考えを導き出す。彼女は、日本の歴史、文化、自然や生活を探求し、それらと向き合うことで、異なる素材のコラージュを制作した。遊工房の周辺で集めた植物を用いたインスタレーションや、和綴じからインスピレーションを受けた彫刻などを発表。



2019.09.18 - 2019.09.22
 フランク・ミルトゲン
 Apeiron

個展のタイトル「アペイロン」は古代ギリシャの言葉。作家はそれが意味する「すべての物事の始まり」「最も原始的な状態」に注目すると同時に、神話的世界から合理的世界への推移にも興味を持っているという。かような歴史的視野と、型にはまらない方法からは「芸術の定義」による束縛とそこからの解放に対する探求心が窺える。これまで、フランク・ミルトゲンは「認識をめぐる問い」をテーマに、実に多様な素材や技法で作品を生み出してきた。今回の滞在では楕円状のイメージを伴う布を数多く制作。それらは、断崖の起伏を拓本的に布に写し、任意の部分に漂白液を滲み込ませて作られている。



<p>2019.11.03 - 2019.11.23 ヒカル・クラーク 善良なるスポーツ精神</p> <p>2020年のオリンピックに向けて東京で起きている建築の移行や西洋の永続的な建築概念とは対照的な日本の建築哲学 “スクラップ・アンド・ビルド”に興味を持ち、調査研究を進めた。更に、オリンピックの歴史とその失策の代替案としての研究をもとに、集中型および分散型の権力の力学の誤りを探り、GENEFO（新興国競技大会）を軸としたインスタレーションを発表した。</p>	
<p>2019.11.03 - 2019.11.23 高島亮三 1984 + 36</p> <p>ここ数年、ジョージ・オーウェルの小説「1984年」に登場する全体主義国家の掲げるスローガン、「WER IS PEACE. FREEDOM IS SLAVERY. IGNORANCE IS STRENGTH.」をテーマにした作品を制作してきた。本展はそれらの近作をまとめたものであり、展覧会名の「1894+36」は、その「1984年」の世界観から36年後を想定した、極々近い未来の日本をイメージしている。すぐ目の前の未来を「1984+36」年ではなく、「2020」年として迎えるために、本展がその一助になる事を願って止まない。</p>	
<p>2019.11.03 - 2019.11.23 クリントン・キング & ジュリー・カーチス タンデム / 縦一列</p> <p>クリントン・キングとジュリー・カーチスは、2007年に遊工房で「スプリット・エンド(別れの先)」という最初の共同展を開催した。この展示では、東京での滞在期間を海外移住者として調査し、人間関係の特質と個人の変容のダイナミクスを探った。12年の時を経た今、彼らは遊工房での2ヶ月間の滞在制作のために戻り、その現場で創作した一連の作品を発表する。この新しい展示は、彼らの芸術実践の進展を、個人と縦一列の両面で省みるものである。</p>	

1-3 イベント、アーティストトーク、クリティック・セッション

アーティスト・トーク

- 2019.01.25 スヴェトラナ・フィアロヴァ 「I love you - 愛してる」
- 2019.01.25 アンティ・ニューソラ 「Antti Nyysölä - アンティ・ニューソラ」
- 2019.01.25 リリアン・オニール 「OPEN STUDIO by リリアン・オニール」
- 2019.01.25 AIR交換プログラム「KAIR」と「FASF」の活動報告会
- 2019.02.22 リリアン・オニール 「霧の壁」
- 2019.03.22 ナタリア・エスクデロ・ロペス 「多島海」
- 2019.03.22 櫻木綾子、加藤康司 「石の体温(と)呼吸の足音」
- 2019.04.26 カイ・レネス 「カイハクシツ(灰白質)」
- 2019.05.25 ユルキ・ヘッキネン 「心の欠如」
- 2019.05.25 ジュリア・サントーリ 「シャドープレー：幻影の土地」
- 2019.06.05 ギリス・アダムソン・センブレ 「大草原と親密な関係 - (オープンスタジオ)」
- 2019.07.25 ダリア・ブルム、地村洋平 「Utting Orners」
- 2019.08.28 ボルハ・ゴメス・ディエス 「喜びの空の形」
- 2019.09.18 ヘレナ・カイッコネン 「日本の小道で」
- 2019.09.18 フランク・ミルトゲン 「アペイロン- Apeiron」
- 2019.11.10 ヒカル・クラーク 「善良なるスポーツ精神」
- 2019.11.10 高島亮三 「1984 + 36」
- 2019.11.10 クリントン・キング&ジュリー・カーチス 「タンデム/縦一列」
- 2019.11.10 ヤン・チェン 「日本の博物館と美術の歴史における旋回システム」

クリティックセッション・講評会

- 2019.06.08 ギリス・アダムソン・センブレ | ゲスト：金井学（アーティスト）、OJUN（東京芸大）
- 2019.07.25 ダリア・ブルム、地村洋平 | ゲスト：グラハム・エラード（CSM）、藤原信幸（東京芸大）、OJUN（東京芸大）

ライブ・パフォーマンス、ワークショップ

- 2019.05.25 ジュリア・サントーリ 「シャドープレー：幻影の土地」
- 2019.06.28 ミア・カバルフィン、ロサム・プルデンシャッドJr. 「桃井第四小学校 体育授業 DANCE WORK SHOP」
- 2019.07.19 アリス・ジェイコブス 「アイ ミ タガイ | Ai mi Tagai」
- 2019.07.04 - 06 ミア・カバルフィン、ロサム・プルデンシャッドJr. 「PAHAYAG」
- 2019.07.11-13 ミア・カバルフィン、ロサム・プルデンシャッドJr. 「PAHAYAG」

2. 関連活動

AIR 事業の実践を通し、AIR がアーティストの活動の一つの要素となり、また同時に社会において大切な役割を持つ存在となることを目指す。アーティストの滞在制作、発表の機会と場としてのAIR活動をベースとした関連活動は、4つの柱で展開している。「AIR交流プログラム」は、国内アーティストの海外での活動の機会と場の創設も大切なミッションと考えて、海外AIRとの交換プログラムの推進、さらにAIR運営の実際の体験や、滞在者をサポートするインターンシップを通じた人材育成など推進している。また、「ネットワーク活動」は、国内外のAIRプログラム間、AIR活動支援機関などとのネットワーク活動を積極的に展開している。「地域活動、コミュニティアート」は、地域でのアートを通じた活動として、都立善福寺公園での野外アート展「トロールの森」へ継続参画などを行っている。「調査・研究」では、AIRの一層の顕在化、AIRと美大の協働による諸活動と調査研究は、関係者との共有を意図して、その活動成果の報告会や、資料閲覧なども継続展開している。特に、マイクロレジデンスの存在、そのネットワーク活動との連携を重点にしている。2013年AIRと美大の協働から生まれた「Y-AIR」概念の実践活動は、その後新たな関連活動の柱とした。

2-1 AIR交流プログラム

アーティストの滞在制作・発表の場と機会としての作家受入の継続と共に、国内作家の海外活動機会の創出を都度実施している。活動は派遣のみならず、多様な形で活動展開している国内外のAIR間の交流を通じた交換プログラムへの発展にも繋がっている。

AIR間交換プログラム 2019

遊工房では海外からの作家の受入と共に、作家、AIR機関との接触から生まれる交流として、国際AIRプログラム間のアーティスト相互交換プログラムを積極的に展開している。2019年としては次の3機関と実施。

・Finnish Artists' Studio Foundation (ヘルシンキ、フィンランド)

2017年にFinnish Artists' Studio Foundation(FASF)と交換プログラム開始の覚書を交わし、3年目の取り組み。FASFの運営するフィンランド国内のスタジオの中から、今年はヘルシンキにあるTapiola Guest Studioと交換プログラムを実施。日本からは河合智子、フィンランドからはチーム・コーペラが各2ヶ月間の滞在制作・発表をした。

2019.05.01-06.30 河合智子 (Tapiola Guest Studio)

2019.12.01-2020. 01.31 テーム・コーペラ (遊工房アートスペース)

本交換プログラムの活動報告：

2019.10.29 18:00- フィンランドセンター 一般公開 30名参加 (河合智子)

2020.01.22 18:00- 遊工房アートスペース 一般公開 30名参加 (チーム・コーペラ)

記録冊子「[アーティスト・レジデンシー交換プログラム 2019 Youkobo x Finnish Artists' Studio Foundation](#)」



・studionAme (レスター、英国)

レスター市にあるstudionAmeは、2人のアーティストYuka NamekawaとSteven Allbuttにより設立されたものである。アーティストのためのスタジオ運営と共に、AIRも運営。Toru Namekawa residency programmeの基で、遊工房とのAIR交換プログラムを2019年より始めた。studionAmeは、レスター市にある2つの大学（デ・モントフォート大学とレスター大学）との協働活動も推進している。日本からは石黒昭が3ヶ月、英国からはヤン・チェンが2ヶ月間の滞在創作・発表をした。

2019.09.01-11.30 石黒昭 (studionAme)

2019.10.01-11.30 ヤン・チェン (遊工房アートスペース)

本交換プログラムの活動報告：

2019.11.10 14:30- 遊工房アートスペース 一般公開 30名参加 (ヤン・チェン)

2020.02.22 16:00- 遊工房アートスペース (石黒昭 | 予定)

記録冊子「[studionAme & Youkobo Art Space - マイクロレジデンスによる協働試行-](#)」



・ルクセンブルクとの交流プログラム

- ルクセンブルグ・アーティストの受入

ルクセンブルグ大使館、ルクセンブルグ文化省からの派遣作家の受入は2011年より始まり、2019年9人目の受け入れを実施。

2019.08.01-09.30 フランク・ミルトゲン（遊工房アートスペース）

- ルクセンブルグへの日本からの作家派遣

2019年初めて、ルクセンブルグへの日本からのAIR派遣が実現した。Annexes du Château de Bourglinster（ルクセンブルク市郊外）
（かねてより、日本からの作家のルクセンブルグでのAIR体験機会に関して調査を双方で検討していたもの）

2019.07.01-09.30 鍵岡アンヌ（Annexes du Château de Bourglinster）

本交換プログラムの活動報告：

2019.09.24 18:00- ルクセンブルグ大使館 招待制 30名参加（フランク・ミルトゲン）

2020.02.22 16:00- 遊工房アートスペース（鍵岡アンヌ | 予定）

記録冊子「ルクセンブルグと日本のアーティスト・イン・レジデンス活動 (AIR) を通じた交流」



2-2 Y-AIRの実践

2013年から「Y-AIR構想」（AIR for Yonug）と称し、美術系大学の諸先生方の理解と支援を得ながら、美大生や美大卒業生がAIRにアクセスしやすい環境作りを目指している。AIRと美大の協働（マイクロの存在であるAIRとマクロの存在である美術大学との協働）を通し、その実施・活動評価をまとめ、持続可能な交換プログラムの仕組みづくりにつなげる。詳細は[web](#)△

・ London/Tokyo Y-AIR Exchange Program 2019

ロンドン芸術大学CSM校と、現地のStudio創作スペース運営組織・Acme Studiosの間で 2013年より始まった若手作家支援プログラム ASP(Associate Studio Program)と、東京藝大油画研究室と遊工房アートスペースによる同様のY-AIR Studio Program(次項)との、相互交換プログラムで、2015年から始まったもの。

2019年はその5年目の活動。5-7月の3ヶ月、日本側から地村洋平が、UK側からは、ギリース・アダムソン・センプレとダリア・ブルムが各6週間、両都市相互での滞在制作、調査・研究をした。期間中、ゲストを招いての展示発表や批評、同時期の遊工房AIRプログラム参画の海外滞在作家や研究者との交流・対話の機会が多々ある。

第1グループ（前半）：2019.05.01-06.14

ギリース・アダムソン・センプレ（遊工房アートスペース）⇄ 地村洋平（ASPプログラム）

第2グループ（後半）：2019.06.15-07.31

ダリア・ブルム（遊工房アートスペース）

評論家による批評の実施：会期中3回実施

金井学(アーティスト)、OJUN (東京芸大)、藤原信幸 (東京芸大)、Graham Ellard (ロンドンCSM)

記録冊子「ロンドン/東京 Y-AIR 交換プログラム 2019 活動報告書」



・ Youkobo Y-AIR Studio Program 2019

遊工房スタジオでの在京若手作家の活動支援プログラム。2019年の4年目は、前年度と同様、協力美大の東京藝大の参画を得て、美大卒業後間もない新人作家の活動の場となるもの。上記交換プログラムと重ねて実施するため、会期中、上記交換プログラムとしての6週間のロンドン滞在制作及び発表の機会と共に、前後して各6週間の独自スタジオ活動を展開する。

- 地村洋平 : スタジオ活動 2019.06.15-07.31



・ London/ Tokyo Y-AIR Exchange Programme 5周年記念展 アイ ミ タガイ | Ai mi Tagai

2015年から毎年実施している「London Tokyo Y-AIR Exchange Programme」の5年目の節目として、これまでの参加作家及び協力美大教員によるグループ展覧会「Ai mi Tagai」と、この活動評価のためのフォーラムを開催した。本展覧会は、2019年東京、2020年秋ロンドンでの開催を予定。「アイ ミ タガイ」とは、相身互い=同様の境遇にあるもの同士が共感し、助け合うことの意で、まだキャリアの浅い同時代のアーティストたちが、新たな体験を共有しつつお互いの存在を意識しながら支え合い、試行錯誤を繰り返すプログラムの特徴と、我々が考える国際交流の意義になぞらえタイトルに掲げた。

2019年7月19日(金) - 28日(日) 13:00-18:00 会期中無休 *大会館での展示のみ最終日15:00まで

会場：旧平櫛田中邸アトリエ、東京藝術大学 Yuga Gallery・大会館

主催：アイ ミ タガイ実行委員会（事務局：遊工房アートスペース）

協力：東京藝術大学 ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 Double agents Acme Studios

岡山県井原市 上野桜木旧平櫛田中邸 NPO法人たいとう歴史都市研究会 一般社団法人谷中のおかって

助成：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、平成31年度文化庁アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業 グレイトブリテン・ササカワ財団

出展作家：アビー・ジョーンズ、アリス・ジェイコブス、磯村暖、エレノ・ターンブル、OJUN、小津航、川越健太、ギリス・アダムソン・センプレ、グラハム・エラード&スティーブン・ジョンストン、郷治竜之介、シヨーン・ラヴェール、ジョンパティストウ・ラガデキ、ダリア・ブルム、地村洋平、トゥーリ・リトヴァック、東山詩織、藤原信幸、堀内崇志、堀内悠希、リディア・デイヴィス

本プログラムの活動報告：

2019.07.20 15:00- 東京藝術大学上野校地美術学部中央棟第6講堂 一般公開 30名参加

記録冊子「ロンドン/東京 Y-AIR 交換プログラム 5周年記念展 Ai mi Tagai 2019」



・Y-AIR Artist Exchange Program, Finland and Japan, 2019

長野県東御市で2016年から始まった国際芸術祭「天空の芸術祭」のAIRプログラム開設の機会に、イベント主催・東御市及び協力機関の東京藝大からの要請をもとに計画がスタート。現地実行委員会、藝大研究室、また、類似の環境芸術祭の経験豊かなフィンランドとの縁をもとに、AIR交換プログラムの継続推進仲間ArtBreak・AIRプログラムマネジャーとラップランド大学（Rovaniemi市, Finland）の協力で始まった試行プログラム。2019年は日本からは高原悠子が、フィンランドからはラウラ・タフヴァナインがそれぞれ3ヶ月間の滞在制作をし、「天空の芸術祭」に両者出展。

2019.06.01-08.31 高原悠子

2019.09.01-11.05 ラウラ・タフヴァナイン

本交換プログラムの活動報告：

2019.10.29 18:00- フィンランドセンター 一般公開 30名参加

記録冊子「Y-AIR フィンランドと日本の試み Part 3 - 環境アートを通じたY-AIR実践、AIRと美術大学の協働」



・Y-AIR 海外派遣プログラム - 西ボヘミア大学ArtCamp 2019

チェコの地方都市Pilsen市にある西ボヘミア大学で毎年夏に開催されているアートの国際サマースクール「ArtCamp」に、2013年より国内美術系大学教官（研究室）の協力を得て、美大生およびアーティストを派遣するプログラム。異文化での短期滞在型(3週間)創作交流機会は、アートとの研鑽と共に、国際交流に挑戦するもの。2019年は、Campへの受講者3名、Camp講師役アーティスト1名を派遣。

2019.07.22-07.26 福士朋子：「comics - manga」講師担当

2019.07.08-07.26 前田乃映、砂川咲里、磯野玲奈 (女子美術大学より受講生派遣)、クドリック華子

本プログラムの活動報告：

2019.11.11 18:00- チェコセンター東京 一般公開 50名参加

記録冊子「Art Camp'を通して考えるAIRと美大の協働 チェコ・日本の交流のかたち」



・ Young Basuque Artists' Residency in Japan, 2019

スペイン・バスク自治政府の若手アーティスト支援プログラム「ERTIBIL BIZKAIA」の受賞者の日本でのAIR機会の協力要請を受け、AIRと美大の協働するY-AIR活動の一環として、遊工房アーツ ペース(東京)と女子美術大学の協働で2018年から始まった若手アーティスト支援活動。昨年は九州のマイクロレジデンス「Studio Kura」と実施、2019年は、黄金町AIR(横浜)と共同で、各1名のアーティストが7、8月の2ヵ月の滞在制作・交流プログラムを実施した。遊工房ではボルハ・ゴメス・ディエスが活動。前半は女子美術大学・日沼研と遊工房のY-AIR協働活動に参加し、co-ume lab.での創作と共にオープンスタジオ、後半は遊工房スタジオでの創作活動及び展示会を開催。8月帰国前には遊工房と黄金町AIR双方の活動報告を実施した。

- ボルハ・ゴメス・ディエス : 2019.07.01-08.31

黄金町AIRプログラム報告展訪問 : 2019.08.23

本プログラムの活動報告 : 2019.08.28 15:00- 遊工房 招待制 20名参加

記録冊子「バスクの若手アーティストの日本滞在制作の活動記録 AIRと美術大学の協働」



・ Y-AIR 講演

京都精華大学

2019.07.02 特別公開講座、村田達彦

女子美術大学

2019.07.08 アートプロデュース演習 II ボルハ・ゴメス・ディエス、ミア・カバルフィン、ロサム・プルデンシャドJr.、辻真木子

2019.08.02-03 アートプロデュース・遊工房 コラボレーション企画「OPEN STUDIO 未熟 無限 欲望」ボルハ・ゴメス・ディエス

2018.11.22 特別公開講座「国際交流文化概論B」ヒカル・クラーク

武蔵野美術大学

2019.05.20 絵画科公開講座「Art & Communication」ジュリア・サントーリ

2019.11.07 絵画科公開講座「Art & Communication」ヤン・チェン



2-3 ネットワーク活動

AIRが社会的な存在となることを目指し、国内外のAIRネットワーク組織への参画と共に、2012年より創設したマイクロレジデンス・ネットワークを通じた独自活動を展開している。各AIRプログラム間やAIR活動支援機関との繋がりなど、様々なネットワーク活動を通じ、AIR利用者であるアーティストや研究者などの活動機会の一層の顕在化、活動機会創出、活動支援や運営の資金の捻出など直接の活動支援と共に、さまざまなAIR活動の共同研究などを行なっている。

1_2018年のネットワーキングトピックス

1. 国際会合

・「ResArtis 京都」参加、京都。2月6日～8日

世界規模の会員制AIRネットワークResArtisが毎年開催する国際総会。京都芸術センターにて開催、遊工房とMicroresidence Networkとして招聘受け参加。2日目のワークショップ「#2.ワークショップ：グループ2 マイクロレジデンス」にて、国内外マイクロレジデンス約10件のディレクター等が登壇し活動の紹介。アーティストと共にマイクロレジデンスの魅力、可能性を議論した。



・「Microresidence Meeting 2019 Kyoto in NISHI-JIN・西陣」開催。京都。2月9日～10日

マイクロレジデンスのより一層の社会への認知と定着、活用の可能性を議論。MicroresidenceメンバーNPO ANEWAL Gallery ほかと京都・西陣の禅寺 興聖寺にて2日間の会合を開催。国内外の多様なプログラムの存在、AIRの利用に関わる知識を得ると共に運営の実態を共有。海外AIR参加、AIR事業参入、ネットワーク構築などの機会創出と、その実現を支援するべく二つの実践的な講座を併設した。



・「Networks + Artworks」参加、京都。2月8日

ResArtis総会のサテライトイベントとして、ヴィラ九条山がオランダ王国大使館の共同で開催。Microresidence Networkとして招聘受け参加。AIRの様々な側面を取り上げたショートプレゼンテーションやスピードデートセッション形式で国内外の専門家とAIRに関心のある参加者が直接会い、交流する機会が設けられた。



・「FIN JPN LAB」参加、東京。10月29日

日本とフィンランドのアーティスト5名によるアート活動と両国でのレジデンス滞在の体験についてフィンランドセンターにて発表。FASFとの交換プログラムに参加した河合朋子、Finland Y-AIRに参加したラウラ・タフヴァナイン・高原悠子、ラップランド大学と東京藝術大学がフィンランドで共同開催したワークショップおよび「VALO HIKARI」展について大橋文男がそれぞれの活動報告のほかパネルディスカッションを展開。モデレーターは所長アンナ・マリア・ウィルヤネン。



・「チェコ・日本の交流のかたち—AIRを通じた文化交流」参加、東京。2019年11月11日

チェコ・プルゼニ市で毎年夏季に開催されている「ArtCamp」に日本からアーティストや学生を派遣するプロジェクトは今年で7年目を迎え、受講者は30名を超えた。翌年100周年を迎えるチェコと日本の豊かな交流を振り返るとともに、AIR参加者の体験を通じてプログラムの役割や意義について検討した。



・「2019 アーティスト・イン・レジデンス研究会&トークショー」参加、東京。11月29日

「地域で活動しているレジデンスの成果を都市部で可視化すること」をテーマに「滋賀県陶芸の森」主導のAIR研究会を女子美術大学にて開催。ケーススタディーの発表として、遊工房とフィンランドのマイクロレジデンス「Waria ArtBreak」が連携実施している地方芸術祭を軸にしたY-AIRプログラムの活動報告をはじめ、AIRと美大の協働の可能性を発表した。



2. 遊工房ネットワーキング

・ Microresidence Networking 「アルメニアのタベ」 開催、東京。2月15日

遊工房に研究滞在中のアルメニアのマイクロレジデンスACOSSの代表 Mkrtych Tonoyan氏と共にマイクロレジデンスの紹介、及びアルメニアでのAIR活動とコーカサス・ロシア・ヨーロッパを介したネットワーク活動の発表。また、Heidi Vogels氏よりグローバルネットワーク「TrasArtist」の紹介、東京に拠点を置く新しい小規模レジデンス運営者等によるプレゼンテーションを実施した。



・ 「Y-AIR Networking - フィリピンケース」 実施、東京。3月10日

陸前高田AIRと女子美術大学、BM Lab.とアジアパシフィックカレッジが共同でアートプロジェクト「DISPLACED」を実施。美術大学生、若手アーティスト同士が、相互にインターンとして運営に携わることにより、留学とは異なるより深い経験の場を提供し、アートを通じた社会活動の意義と国際社会貢献のあり方を実践的に学ぶプログラム展開や今後の交流について情報共有、議論した。



・ 「LTYE 5周年記念プログラム - Ai mi Tagai」 開催、東京。7月19日～28日

2015年から毎年実施している「London/Tokyo Y-AIR Exchange Programme (LTYE)」の5年目の節目として、これまでの参加作家及び協力美大教員によるグループ展覧会「Ai mi Tagai」と、この活動評価のためのフォーラムを開催。キャリアの浅い同時代のアーティストたちが、新たな体験を共有しつつお互いの存在を意識しながら支え合い、試行錯誤を繰り返すプログラムの特徴と、我々が考える国際交流の意義になぞらえタイトルに掲げた。本展覧会は、2019年東京、2020年ロンドンでの開催を予定。



・ 「Y-AIR Networking - バスクケース」 実施。8月23,28日

スペイン・バスク自治政府の若手アーティスト支援プログラム「ERTIBIL BIZKAIA」の受賞者の日本でのAIR機会の協力要請を受け、AIRと美大の協働するY-AIR活動の一環として、遊工房アトスペース(東京)と女子美術大学アートプロデュース日沼研の協働で2018年から始まった若手アーティスト支援活動。初年度は九州のマイクロレジデンス「Studio Kura」と、2019年度は、黄金町AIR(横浜)と共同実施、各1名のアーティストが7-8月の2ヵ月間の滞在制作・交流プログラムを実施。また、帰国前の成果報告会も共同実施した。



・ 「Y-AIR Networking - メルボルンケース」 実施、東京。9月11日-12日

RMITの日本の文化芸術研修プログラム「The Japanese Contemporary Art Study Intensive (J-CASI)」の一環で、学部生及び教員が2日に渡り遊工房を訪問。遊工房の活動紹介、及び作家のスタジオ訪問を通して、AIRの理解・交流機会を提供。RMIT AIRプログラムコーディネーターAndrew氏による事例共有と次年度のY-AIR交流を含めた今後の交流展開を議論した。
(2020年RMIT 新卒生の受入開始予定)



・ 「Y-AIR Networking - アルメニアケース」 実施、東京。12月18日

陸前高田AIRで研究滞在中を終えたMkrtych Tonoyan氏による現地での活動報告、自身が運営するマイクロレジデンスACOSS、及びコーカサス地方でのアートシーンやY-AIRの取り組みについて活動発表をした。



II_個別相談・コンサル

1. AIR設立、活性化検討部会

- ・ 池袋モンパルナス計画 (西田アトリエ) : 5/4
- ・ 神奈川県西湘エリアAIR活性化 (須藤美術館・西湘アートスペース、小田原市、CONNECTIVE) : 10/16、11/15
- ・ 佐渡島マイクロレジデンス : 3月
- ・ 我孫子マイクロレジデンス : 4月
- ・ 久留米マイクロレジデンス : 5月、11月
- ・ Airbnbコンタクト
- ・ Shell賞AIRコンサル

2. AIR体験機会コンサル

- ・ 美大生、美大卒業後若手アーティスト
- ・ アーティスト

2-4 地域活動、コミュニティーアート

アーティストの社会的な存在を、その活動を通して広く認知してもらうことは、地域にある遊工房の大事な役割でもありと考えている。身近に現代アートに触れる機会として、遊工房自身が発信するイベントばかりでなく、地元都立善福寺公園での野外アート展「トロールの森」、地域の公立小学校での土曜教室「アートキッズ」などとの共催と共に、地域で活動する各種アート団体との連携も積極的に進めている。

トロールの森 2019

2019年は「囁き」をテーマに開催（11月3日-23日）。「野外×アート」は、善福寺公園でのダイナミックなインスタレーションのほか、日・祝日を中心にしたワークショップ、多彩な身体表現を楽しむ野外劇場を展開。37組の作家たちが様々なプログラムで園内を賑わせた。「まちなか×アート」は、西荻窪から善福寺公園をアートでつなぐプログラムで、30団体が展示やパフォーマンスに参加した。遊工房アートスペースもサテライト会場として、Studio1でヒカル・クラーク、Studio2でクリントン・キング・ジュリーカーチス、Studio3で高島亮三が展覧会を開催した。

ヒカル・クラーク 「善良なるスポーツ精神」
クリントン・キング & ジュリー・カーチス 「タンデム / 縦一列」
高島亮三 「1984 + 36」



2019.11.10 Artists' Talk 「回顧と展望」

Part1の「何でこうなるの…？」では、建築評論家 五十嵐太郎氏をゲストにヒカル・高島によるアーティストトークを実施。作家の制作の着想からどのように展開し、形にしていけるのか、そして国内外のアートシーンの今を来場者からの質問などを通し、議論した。

また、Part2の「何でこうなった…？遊工房30周年」では、ヤンの研究成果発表と共に、12年ぶりの再滞在作家であるクリントンとジュリー、そして遊工房と長く活動する高島と共に、これまでのAIR活動30年を振り返り、AIRの意義と価値を作家や来場者等と語った。

2019.11.04 「西荻アートシーン これからの西荻美術」

トロールの森の連携企画として、西荻ワークショップ・アートウィークのトークイベントに登壇。地元小学校教員やギャラリー代表等と共に西荻窪の現在のアートシーンと今後の展開について語った。

* 「トロールの森」のはじまり

「トロールの森」は、都立善福寺公園（杉並区）を舞台に遊工房を中心にアーティスト主導の野外展示活動とし2002年に始まった、今年で16周年を迎える国際野外アート展。2011年開催10周年を機会に遊工房から地元の実行委員会主催に発展、2013年からはJR西荻窪駅周辺へとエリアを拡大し、カフェでの展示をはじめ、自然食レストランやピリヤード場を使った舞踏やマイム公演、まちの歴史をたどって歩くイベント等を実施してきた。

地域連携

地元小学校、アート系NPO、創作教室、ギャラリーなどとの連携も積極的に進めている。また、地域にあるリソースの活動としても地域連携は大事な側面である。

・桃井第四小学校

「身近なプロフェッショナル（総合的な学習の時間）」

小学生のキャリア支援プログラムとして、地域で展開している仕事の紹介。

2019.11.12 桃四小6年生に向け、プレゼンテーションとワークショップ、交流会に参加

・NPO法人TFF

2019.06.08 杉並区アートサポーター講座実習に協力し、「すぎなみ地域大学」で遊工房の活動紹介。

・西荻ワークショップ・アートマップ

西荻窪のオルタナティブスペースを掲載したマッピングに参加。（事務局：仙遊堂）

2-5 調査研究

AIR活動実践を通じた調査・研究活動として、自らの調査と共に、Face to Faceの対話をベースにAIR相互訪問をはじめ、寺子屋的な会合、公開のフォーラム、シンポジウム等の開催、参画などを積極的に展開。AIRの社会装置としての存在を社会にアピールする大事な活動である。研究・調査活動は報告としてまとめ、Webを通し公開し情報共有に務めている。予算次第で印刷発行も適時実施。

調査訪問・交流

- 2019.02.06-07 ResArtis 京都（京都）村田達彦、村田弘子、辻真木子
- 2019.02.09-10 Microresidence Meeting 2019 Kyoto in NISHI-JIN・西陣（京都）村田達彦、村田弘子、辻真木子
- 2019.02.08 Networks + Artworks（京都）村田達彦、辻真木子
- 2019.05.04 池袋モンパルナス（東京）村田達彦、村田弘子
- 2019.08.23 AIR間交流・黄金町AIR訪問（神奈川）ボルハ・ゴメス・ディエス・村田達彦、辻真木子
- 2019.10.16 神奈川県西湘エリアAIR活性化 座談会（小田原）村田達彦、村田弘子
- 2019.11.15 神奈川県西湘エリアAIR活性化 座談会（小田原）村田達彦、村田弘子

フォーラム・シンポジウム等

- 2019.02.15 Microresidence Networking「アルメニアの夕べ」@遊工房
- 2019.06.08 すきなみ地域大学 @遊工房
- 2019.06.09 レクチャーシリーズ「アーティスト・キャリアをつくる」@アキバタマビ（東京）
- 2019.07.20 LTYE 5周年記念プログラム - Ai mi Tagai @ 東京藝術大学上野校地美術学部中央棟第6講堂（東京）
- 2019.08.28 バスク若手アーティストのY-AIR活動報告会 @遊工房
- 2019.10.29 FIN/JPN Lab. @フィンランドセンター（東京）
- 2019.11.04 「西荻アートシーン これからの西荻美術」@数奇和（東京）
- 2019.11.10 Artists' Talk「回顧と展望」@遊工房
- 2019.11.11 チェコ・日本の交流のかたち—AIRを通じた文化交流 @チェコセンター（東京）
- 2019.11.29 アーティスト・イン・レジデンス研究会&トークショー @女子美術大学（東京）
- 2019.12.18 Y-AIR Networking-アルメニアケース @遊工房



2-6 アーカイブス

AIR実践をベースに関連する諸活動、マイクロレジデンスの一層の顕在化、AIRと美大の協働による無限の可能性の調査研究は、共有すべく活動報告として発表、また、調査したAIR情報は、遊工房滞在作家の活動記録と共に、アーカイブとしての整理を心掛けている。国内外のAIRプログラムデータ、滞在アーティストの活動記録、調査研究の成果のアーカイブは順次閲覧できるようにしており、AIRへの参加の助言、AIR設立やネットワーキングの相談なども適時受付けている。AIRプログラムの調査・研究を通し、AIRそして「マイクロレジデンス」の顕在化する活動も進めている。アーティストと共に、社会でのその活動の意義が広く浸透することを願っている。

- ・出版物、掲載記事など

1. 出版物

- フィンランドの作家たち（その4）
- ロンドン/東京 Y-AIR 交換プログラム 2019 活動報告書
- ロンドン/東京 Y-AIR 交換プログラム 5周年記念展 Ai mi Tagai 2019
- 'Art Camp'を通して考えるAIRと美大の協働 チェコ・日本の交流のかたち
- バスクの若手アーティストの日本滞在制作の活動記録 AIRと美術大学の協働
- Y-AIR フィンランドと日本の試み Part 3 - 環境アートを通じたY-AIR実践、AIRと美術大学の協働
- ルクセンブルグと日本のアーティスト・イン・レジデンス活動 (AIR) を通じた交流
- stunionAme & Youkobo Art Space - マイクロレジデンスによる協働試行-
- アーティスト・レジデンス交換プログラム 2019 Youkobo x Finnish Artists' Studio Foundation
- 1984 + 36 | 高島亮三
- アイディアの結晶化に向けて- Youkobo Returnee Residence Program, YRP 第3弾「回顧と展望 - 遊工房30周年」

2. AIR展覧会カタログ、案内状など

会期	イベントタイトル・アーティスト	内容
2019.02.20-2019.02.24	霧の壁 リリアン・オニール	DM、カタログ
2019.03.20-2019.03.24	多島海 ナタリア・エスクデロ・ロペス	DM、カタログ
2019.03.20-2019.03.24	石の体温(と)呼吸の足跡 櫻木綾子、加藤康司	DM、カタログ
2019.04.24-2019.04.28	カイハクシツ(灰白質) カイ・レネス	DM,カタログ
2019.06.05-2019.06.09	大草原と親密な関係-(オープンスタジオ) ギリース・アダムソン・センブレ	DM
2019.07.04-2019.07.13	PHAYAG ミア・カバルフィン、ロサム・ブルデンシャドJr.	フライヤー
2019.07.25-2019.07.28	Utting Orners ダリア・ブルム、地村洋平	DM
2019.08.24-2019.08.28	喜びの空の形 ボルハ・ゴメス・ディエス	フライヤー カタログ
2019.09.18-2019.09.22	日本の小道で ヘレナ・カイツコネン	DM
2019.09.18-2019.09.22	アペイロン-Apeiron フランク・ミルトゲン	カタログ
2019.11.03 - 2019.11.23	タンデム / 縦一列 クリントン・キング & ジュリー・カーチス	フライヤー カタログ
2019.11.03 - 2019.11.23	1984 + 36 高島亮三	フライヤー カタログ

3. 掲載記事等

美術手帖 ART NAVI、月刊ギャラリー、Tokyo Art Beat、各国大使館・文化センター・交流機関 HP にて 滞在及び展示情報掲載

新聞

- ・「朝日新聞」11月2日掲載（トロールの森）
- ・「東京新聞」11月1日掲載（トロールの森）

情報誌

- ・『ランドスケープデザイン』10月23日販売（トロールの森）
- ・『中央線が好きだ。』vol.15（JR東日本） 9月19日発行（トロールの森）
- ・月刊『散歩の達人』11月号「祭り&イベントカレンダー」10月21日発行（トロールの森）
- ・『SUGINAMI ART SANPO イベントガイドVOL.02』杉並区文化・交流課（トロールの森）

ウェブサイト

- ・なみじゃない杉並（トロールの森）
- ・リビングむさしのweb 11月1日掲載（トロールの森）
- ・西荻ワークショップ・アートマップ（遊工房活動）

カタログ

- ・フィンランドセンターFIN/JPN LAB プログラムカタログ（交換、交流プログラム）

2019年活動一覽 - overview

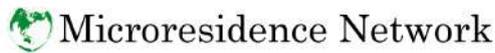
	Space	Jan.	Feb.	March	April	May	June	July	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.
Youkobo	AIR1 <small>Residence 1 Studio 1</small>	Svetlana Fialová	Natalia Escudero Lopez	Julia Santoli	Mia Cabalfin & Rhosam Prudenciado Jr.	Borja Gomez Diez	Hikalu Clark	Teemu Korpela					
		AIR2 <small>Residence 2 Studio 2</small>	Antti Nyyssola	Mkrtich Tonoyan	Kai Rennis	Gillies Sample Adamson (LYTE 2019)	Helena Kaikkonen	Clinton King & Julie Curtiss	Benjamin Woods				
			AIR3 <small>Residence 3 Studio 3</small>	Lillian O'Neill	Ms Paivi Luukkanila	Ms Marianne Backlen	Mr Jyrki Heikkinen	Mittgen Frank	Ryozo Takashima	Anita Jensen			
				GAP		AI-MI-TAGAI	Yang Chen						

Exchange Program	London, UK					Yohei Chimura							
	Pilsen, Czech						Tomoko Fukushi						
	Finland					Tomoko Kawai		Yuko Takahara					
	Leicester									Akira Ishiguro			
	Luxembourg							Anne Kakioka					
Conference Meeting, Research	Local		Kyoto								Finnish Institute in Japan	Czech Center Tokyo	

■ Self-funded
 ■ Institutional Recommendation Program
 ■ Y-AIR
 ■ Youkobo Returnee Residency



平成31年 アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業



Youkobo Art Space Annual Report 2019

Edit : Youkobo Art Space
Zempukuji 3-2-10, Sugunami-ku, Tokyo,
167-0041 Japan
TEL/FAX: 03-3399-7549
E-mail: info@youkobo.co.jp
URL: http://www.youkobo.co.jp
Published in Japan January 2019